

島田はかつてお常の事を口にしなかつた。お常も健三の機嫌に反して、島田に就いては何も語らなかつた。

「あの御喪さんの方がまだ彼の人より好いでせう」

「何うして」

「五圓貫ふと黙つて歸つて行くから」

島田の請求の訪問毎に増長するのに比べて、お常の態度は尋常に逸なかつた。

八十九

目ならず鼻の下の長い、島田の顔が又健三の座敷に現はれた時、彼はすぐお常の事を聯想した。

彼等だつて生れ付いての敵同志でない以上、仲の好い昔もあつたに違ひない。他から爪に灯を點すやうだと云はれるのも構はずに、金ばかり溜めた當時は、何んなに楽しかつたらう。何んな未来の希望に支配されてゐたらう。彼等に取つて降参しきの唯一の記念とも見るべき金が何處かへ飛んで行つてしまつた後、彼等は夢のやうな自分達の過去を、果して何う眺めてゐるだらう。

健三はもう少しでお常の話を島田にする所

であつた。然し過去に無感な表情しか有たない島田の顔は、何事も覚えてゐないやうに笑つた。昔の憎悪、古い愛執、そんなものは當時の金と共に彼の心から消え失せて仕舞つたと思はれなかつた。

彼は腰から煙草入を出して、煙草を唇首へ詰めた。吸殻を落とすときには、左の掌で煙管を受けて、火鉢の縁を敲かなかつた。脂が溜つてゐると見えて、吸ふときにじゆう／＼音がした。彼は無言で懐中を探つた。それから健三の方を向いた。

「少し紙はありませんか、生憎煙管が詰つて」

彼は健三から受取つた半紙を割いて小煙を拵へた。それで二回も三回も羅字の中を掃除した。彼は斯ういふ事をするのに最も調れた人であつた。健三は黙つて其手際を見てゐた。

「段々暮になるんで御忙しいでせう」

彼は疏通の好くなつた煙管をぶつ／＼と心持好さうに吹きながら斯う云つた。

「我々の家業は暮も正月もありません。年が年中同じ事です」

「そりや結構だ。大抵の人はさうは行きませんよ」

島田がまだ何か云はうとしてゐるうちに、奥

で子供が泣き出した。

「おや赤ん坊のやうですわね」

「え、つい此間生れたばかりです」

「そりや何うも。些も知りませんでした。男ですか女ですか」

「女です」

「へえ、失禮だが是で幾人目ですか」

島田は色々な事を訊いた。それに相當な受應をしてゐる健三の胸に何んな考へが浮かんてゐるか丸で氣が付かなかつた。

出産率が確ると死亡率も増すといふ統計上の議論を、つい四五日前ある外國の雜誌で讀んだ健三は、其時赤ん坊が何處かで一人生れば、年寄が一人何處かで死ぬものだといふやうな理窟とも空想とも付かない變な事を考へてゐた。

「つまり身代りに誰かゞ死ななければならぬのだ」

彼の觀念は夢のやうにぼんやりしてゐた。詩として彼の頭をぼう／＼と侵す丈であつた。それをもつと明瞭になる迄理解の力で押し詰めて行けば、其身代りは取りも直さず赤ん坊の母親に違なかつた。次には赤ん坊の父親でもあつた。けれども今の健三は其處迄行く氣はなかつた。

たゞ自分の前にゐる老人にだけ意味のある眼を注いだ。何の爲に生きてゐるか殆ど意義の認めやうのない此年寄は、身代りとして最も適當な人間に違なかつた。

「何ういふ譯で斯う丈夫なのだらう」

健三は殆ど自分の想像の淺層を加減さへ忘れてしまつた。さうして人並でないわが健三状態に就いては、毫も責任がないものゝ如き思ひしさを感じた。其時島田は彼に向つて突然斯う云つた。

「お経もとう／＼亡くなつてね。御祝儀は濟んだが」

連も助からないといふ事実は、香腸病といふ名前から推して、とうに承知してゐたやうなもの、改まつてさう云はれて見ると、健三も急に氣の毒になつた。

「さうですか。可哀想に」

「なに病氣が病氣だから連も捲りつこないんです」

島田は平然としてゐた。死ぬのが當り前だといつたやうに煙草の輪を吹いた。

然し此不幸な女の死に伴つて起る經濟上の

影響は、島田に取つて死そのものよりも遙に重大であつた。健三の豫想はすぐ事實となつて彼の前に現れなければならなかつた。

「それに就いて是非一つ聞いて貰はないと困る事があるんです」

此處迄来て健三の顔を見た島田の様子は緊張してゐた。健三は聴かない先から其後を推察する事が出来た。

「又金でせう」

「まあ左右で。お経が死んだんで、柴野とお藤との縁が切れちまつたもんだから、もう今迄のやうに月々送らせる譯に行かなくなつたんでね」

島田の言葉は變にぞんざいになつたり、又鄭重になつたりした。

「今迄は金鶏動草の年金だけはちゃん／＼と此方へ来たんですがね。それが急に無くなると、丸で目的が外れる様な始末で、私も困るんです」

彼はまた調子を改めた。

「兎に角斯うなつちや、御前を指してもう外に世話をして貰ふ人は誰もありません。だから何うかして呉れなくつちや困る」

「さう他にのし懸つて来たつて仕方がありません」

「今私にはそれ丈の事をしなければならぬ。因縁も何もないんだから」

島田は漸と健三の顔を見た。半ば探りを入れやうな、半ば弱いものを脅かすやうな其取付は、單に相手の心を激昂させる丈であつた。健三の態度から深入の危険を知つた島田は、すぐ問題を断切つて小さくした。

「永い間の事は又談々御話をするとして、ぢや此急場丈でも一つ」

健三には何ういふ急場が彼等の間に持ち上つてゐるのか解らなかつた。

「此暮を越さなくつちやならないんだ。何處の宅だつて暮になりや百と二百と課まつた金の要るのは當り前だらう」

健三は勝手にしろといふ氣に成つた。

「私にそんな金はありませんよ」

「笑談云つちや不可い。是丈の構をしてゐて、其位の融通が利かないなんて、そんな筈があるもんか」

「有つても無くつても、無いから無いといふ丈の話です」

「ぢや云ふが、御前の収入は月に八百圓あるさうぢやないか」

健三は此無茶苦茶な言掛りに怒らされるより

九十

然し此不幸な女の死に伴つて起る經濟上の



は寧ろ驚かされた。「八百圓だらうが千圓だらうが、私の収入は私の収入です。貴方の關係した事ぢやありません。」

鳥田は其處迄来て黙つた。健三の答が自分の豫期に外れたといふやうな風も見えた。づうづうしい割に頭の發達してゐない彼は、それ以上相手を何うする事も出来なかつた。

「ちやいくら困つても助けて呉れないと云ふんですね」「え、もう一文も上げません」鳥田は立ち上つた。杏脱へ下りて、開けた格子を締める時に、彼は又振り返つた。「もう参上りませんか」

「誰が遣るもんか」細君は微笑しながら、そつと夫を眺めるやうな態度を見せた。「あの御婆さんの方が細く長く續くからまだ安全ね」鳥田の方だつて、是で片付くもんかね」健三は吐出すやうに斯う云つて、来るべき次の幕さへ頭の中に豫想した。

九十一

を知らなかつた。發育に伴ふ彼の生氣はいくら抑へ付けられても、下からむく／＼と頭を擡げた。彼は遂に憂鬱にならずに済んだ。子供を澤山有つてゐた彼の父は、毫も健三に依怙する氣がなかつた。今に世話にならうといふ下心のないのに、金を掛けるのは一錢でも惜しかつた。繋がる親子の縁で仕方なしに引き取つたやうなもの、飯を食はせる以外に、面倒を見て遣るのは、たゞ損になる丈であつた。

其上肝心の本人は歸つて来ても籍は復らなかつた。いくら實家で丹精して育て上げたにしろ、いざといふ時に、又件れて行かれれば夫迄であつた。

「食はず丈は仕方がないから食はして遣る。然し其外の事は此方ぢや構へない。先方でするのが當然だ」父の理窟は斯うであつた。鳥田は又鳥田で自分に都合の宜い方からばかり事狀の成行を觀望してゐた。

「もう此方へ引き取つて、給仕でも何でもさせるから左右思ふが可い」健三が或日養家を訪問した時に、鳥田は何かの序に斯んな事を云つた。健三は驚いて逃げ歸つた。酷薄といふ感じが子供心に淡い恐ろしさを與へた。其時の彼は幾歲だつたか能く覚えてゐないけれども、何でも長い間の修業をして立派な人間になつて世間に出なければならぬといふ意が、もう十分萌してゐる頃であつた。

「給仕になんぞされては大變だ」彼は心のうちで何遍も同じ言葉を繰り返した。幸にして其言葉は徒勞に繰り返されなかつた。彼は何うか斯うか給仕にならずに済んだ。「然し今の自分は何うして出来上つたのだらう」

彼は斯う考へると不思議でならなかつた。其

不思議のうちには、自分の周囲と能く聞ひ終せただものだといふ誇りも大分交つてゐた。さうしてまだ出来上らないものを、既に出来上つたやうに見る得意も無慮含まれてゐた。彼は過去と現在の對照を見た。過去が何うして此現在に發展して来たかを疑つた。しかも其現在の爲に苦しんでゐる自分には丸で氣が付かなかつた。

彼と鳥田との關係が破裂したのは、此現在の御蔭であつた。彼がお常を思ひの、姉や兄と同化し得ないのも此現在の御蔭であつた。細君の父と段々離れて行くのも亦此現在の御蔭に違なかつた。一方から見ると、他と反が合はなくなるやうに、現在の自分を作り上げた彼は氣の毒なものであつた。

九十二

細君は健三に向つて云つた。「貴天に氣に入る人は何うせ何處にもゐないでせうよ。世の中はみんな馬鹿ばかりですから」健三の心は斯うした諷刺を笑つて受ける程落付いてゐなかつた。周囲の事情は雅量に乏しい彼を益窮屈にした。「御前は役に立ちさへすれば、人間はそれで好

いと思つてゐるんだらう」「だつて役に立たなくつちや何にもならないぢやありませんか」生憎細君の父は役に立つ男であつた。彼女の弟もさういふ方面にだけ發達する性質であつた。これに反して健三は甚だ實用に遠い生れ付であつた。

彼には轉宅の手傳ひすら出来なかつた。大掃除の時にも彼は懐手をしたなり澄ましてゐた。行李一つ捨けるにさへ、彼は細紐を何う渡すべきものやら分らなかつた。

「一男の癖に」動かない彼は、傍のもの、眼に、如何にも氣利かない鈍物のやうに映つた。彼は猶更動かなかつた。さうして自分の本領を益反對の方面に移して行つた。彼は此見地から、昔細君の弟を、自分の住んでゐる遠い田舎へ伴れて行つて教育しようとした。其弟は健三から見ると如何にも生意氣であつた。家庭のうちの横行して誰にも遠慮會釋がなかつた。ある理學士に毎日自宅で課業の復習をして貰ふ時、彼は其人の前で構はず胡坐をかいた。又其人の名を何君々々と君づけに呼んだ。



「あれぢや仕方がない、私に御預けなさい。」  
私三が田舎へ連れて行つて育てるから」  
健三の申出は細君の父によつて黙つて受け取られた。さうして黙つて捨てられた。彼は眼前に横暴を志にする我子を見て、何といふ未來の心配も抱いてゐないやうに見えた。彼ばかりか、細君の母も不氣であつた。細君も一向氣に掛ける様子がなかつた。  
「若し田舎へ遣つて貴夫と衝突したり何かすると、折合が悪くなつて、後が困るから、それで已めたんださうです」  
細君の辯解を聞いた時、健三は満更の嘘とも思はなかつた。けれども其他にまだ意味が残つてゐるやうにも考へた。  
「馬鹿ぢやありません。そんな御世話にならなくつても大丈夫です」  
周囲の様子から健三は詳細の本意が却つて此處にあるのではなからうかと推察した。  
成程細君の弟は馬鹿ではなかつた。寧ろ情柄過ぎた。健三にも其點はよく解つてゐた。彼が自分と細君の未來の爲に、彼女の弟を教育しようとしたのは、全く見當の違つた方面にあつた。さうして遺憾ながら其方面は、今日に至る迄いまだに細君の父母にも細君にも了解され

てゐなかつた。  
「役に立つばかりが能ぢやない。其位の事が解らなくつて何うするんだ」  
健三の言葉は勢ひ權柄づくであつた。傷けられた細君の顔には不満の色があり／＼と見え  
た。  
「健三の直つた時細君は又健三に向つた。——  
「さう頭からがみ／＼云はないで、もつと解るやうに云つて聞かして下すつたら好いでせう」  
「解るやうに云はうとすれば、理窟ばかり担ね返すつていふぢやないか」  
「だからもつと解り易い様に、私に解らないやうな小六づかしい理窟は已めにして」  
「それぢや何うしたつて説明しやうがない。數字を使はずに算術を遣れと注文するのと同じ事だ」  
「だつて貴夫の理窟は、他を捻ぢ伏せるために用ひられるとより外に考へやうのない事があるんですもの」  
「御前の頭が悪いから左右思ふんだ」  
「私の頭も悪いかも知れませんが、中味の無い空つぽの理窟で捻ぢ伏せられるのは嫌ひですよ」  
二人は又同じ輪の上をぐる／＼廻り始めた。

九十三

面と向つて夫としくり掛け合ふ事の出来な  
い時、細君は巴むを得ず彼に背中を向けた。さ  
うして其處に寝てゐる子供を見た。彼女は思ひ  
出したやうに、すぐ其子供を抱き上げた。  
「章魚のやうにぐに／＼してゐる肉の塊と彼  
女との間には、理窟の壁を分別の結もなかつた。  
自分の觸れるものが取りも直さず自分のやうな  
氣がした。彼女は温い心を赤ん坊の上に吐き  
掛けるために、肩を着けて所詮はぞ接吻した。  
「貴夫が私のものでなくつても、此子は私の  
の物よ」  
彼女の態度から斯うした精神が明かに讀ま  
れた。  
其赤ん坊はまだ眼が立きへ判明してゐなかつ  
た。頭には何時迄待つても殆ど毛らしい毛が  
生えて來なかつた。公平な眼から見ると、何う  
しても一個の怪物であつた。  
「變な子が出來たものだなあ」  
健三は正直な所を云つた。  
「何處の子だつて生れたては皆此通りです」  
「眞逆左右でも無からう。もう少しは整つたの  
も生れる筈だ」

「今に御覽なさい」  
細君は左も右の信のあるやうな事を云つた。健  
三には何といふ見當も付かなかつた。けれども  
彼は細君が此赤ん坊のために夜中何處となく眼  
を覺ますのを知つてゐた。大事な睡眠を犠牲に  
して、少しも不愉快な顔を見せないのも承知  
してゐた。彼は子供に對する母親の愛情が父  
親のそれと比べて何の位強いかの疑問にさへ  
達着した。  
四五日前少し強い地震があつた時、隠病な彼  
はずぐ縁から庭へ墜下した。彼が再び座敷へ上  
つて來た時、細君は思ひも掛けない非難を彼の  
顔に投げつけた。  
「貴夫は不人情ね。自分一人好ければ構はな  
い氣なんだから」  
何故子供の安危を自分より先に考へなかつた  
かといふのが細君の不平であつた。咄嗟の衝動  
から起つた自分の行爲に對して、斯んな批評を  
加へられようとは夢にも思つてゐなかつた健三  
は驚いた。  
「女にはあゝいふ時でも子供の事が考へられ  
るものかね」  
「當り前ですわ」  
健三は自分が如何にも不人情のやうな氣が

した。  
然し今の彼は我物語に子供を抱いてゐる細君  
を、却つて冷やかに眺めた。  
「鵜の分らないものが、いくら東になつたつて  
仕様がな」  
しばらくすると彼の思索がもつと廣い區域に  
互つて、現在から遠い未來に延びた。  
「今に其子供が大きくなつて、御前から離れて  
行く時期が來るに極つてゐる。御前と己と離れ  
ても、子供と己と離れ合つて一つになつてゐれ  
ば、それで深山だといふ氣でゐるらしいが、そ  
れは間違ひだ。今に見る」  
書齋に落付いた時、彼の感想が又急に科學的  
色彩を帯び出した。  
「芭蕉に實が結ると翌年から其管は枯れて仕  
舞ふ。竹も同じ事である。動物のうちには子を  
生む爲に生きてゐるのか、死ぬ爲めに子を生む  
のが解らないものが幾何でもある。人間も緩慢  
ながらそれに準じた法則に欠つて支配されてゐ  
る。母は一旦自分の所有するあらゆるものを犠  
牲にして子供に生を與へた以上、また餘りのあ  
らゆるものを犠牲にして、其生を守護しなければ  
なるまい。彼女が天からさういふ命令を受け  
て此世に出たとするならば、其報酬として子供

九十四

を獨占するのは當り前だ。故意といふよりも自  
然の現象だ」  
彼は母の立場を斯う考へ盡した後、父として  
の自分の立場をも考へた。さうしてそれが母の  
場合と何う違つてゐるかに思ひ到つた時、彼は  
心のうちで又細君に向つて云つた。  
「子供を有つた御前は仕合せである。然し其仕  
合せを享ける前に御前は既に多大な犠牲を拂つて  
ゐる。是から先も御前の氣の付かない犠牲を何  
の位拂ふか分らない。御前は仕合せかも知れ  
ないが、實は氣の毒なものだ」  
年々は段々暮れて行つた。寒い風の吹く中に細  
かい雪片がちら／＼と見え出した。子供は日に  
何度となく「もういくつ寝ると御正月」といふ  
唄をうたつた。彼等の心は彼等の口にする唄  
歌の通りであつた。來るべき新年の希望に充ち  
てゐた。  
書齋にゐる健三は時々手に洋筆を持つた儘、  
彼等の聲に耳を傾けた。自分にもあゝ云ふ時代  
があつたのかしら杯と考へた。  
子供は又且那の賑ひな大晦日といふ種歌を  
うたつた。健三は苦笑した。然しそれも今の自



分の身の上には痛切に的中ならなかった。彼はただ厚い四つ折の半紙の束を、十も二十も机の上に乗せて、それを一枚毎に読んで行く努力に働かされてゐた。彼は読みながら其紙へ赤い印氣で棒を引いたり丸を書いたり三角を附けたりした。それから細かい数字を並べて面倒な勘定もした。

半紙に認められたものは悉く鉛筆の走り書なので、光線の暗い所では字劃さへ判然しないのが多かつた。亂暴で讀めないものも時々出て来た。彼は眼を上げて、積み重ねた束を見る健三は落膽した。「ペネロピーの仕事」といふ英語の催請が何遍となく彼の口の上につた。

「何時まで経つたつて片付きやしない」  
彼は折々筆を擱いて溜息をついた。  
然し片付かないものは、彼の周圍前後にまだ幾何でもあつた。彼は不審な顔をして又細君の持つて来た一枚の名刺に眼を注がなければならなかつた。

「何だい」  
「鳥田の事に就いて一寸御目に掛りたいつていふんです」  
「今差支へるからつて返して呉れ」  
一度立つた細君はすぐ又戻つて来た。

てゐた。彼は手も洗はずに其儘座敷へ出た。鳥田のために来た其男は、前の吉田に比べると少し型を異にしてゐたが、健三から云へば、雙方共殆ど差別のない位懸け離れた人間であつた。

彼は緞の狩袴に角帯を締めて白足袋を穿いてゐた。商人とも紳士とも片の付かない彼の様子なり言葉遣ひなりは、健三に差配といふ一種の人柄を思ひ起させた。彼は自分の身分や職業を打明ける前に、卒然として健三に訊いた。

「貴方は私の顔を覚えて御出でですか」  
健三は驚いて其人を見た。彼の顔には何等の特徴もなかつた。強ひて云へば、今日迄たゞ世帯染みて生きて来たといふ位のものであつた。

「何うも分りませんね」  
彼は勝ち誇つた人のやうに笑つた。  
「さうでせう。もう忘れても好い時分ですから」  
彼は區切を置いて又附け加へた。  
「然し私や是でも貴方の坊ちゃん坊ちゃんて云はれた昔をまだ覚えてゐますよ」  
「左右ですか」  
健三は素つ氣ない挨拶をしたなり、其人の顔を凝と見守つた。  
「何うしても思ひ出せませんか。ぢや御話

「何時何つたら好いか御都合を聞かして頂きたいんですつて」  
健三はそれ所ぢやないといふ顔をしながら、自分の傍に高く積み重ねた半紙の束を眺めた。細君は仕方なしに催促した。

「何と云ひませう」  
「明後日の午後に来て下さいと云つて呉れ」  
健三も仕方なしに時日を指定した。  
仕事を中絶された彼はぼんやり煙草を吹かし始めた。所へ細君が又入つて来た。

「歸つたかい」  
「ええ」  
細君は天の前に廣げてある赤い印の付いた汚らしい書きものを眺めた。夜半に何度となく赤ん坊のために起こされる彼女の面影が健三に解らないやうに、此半紙の山を細密に讀み通す夫の困難も細君には想像出来なかつた。

「また何か左右云つて来る氣でせうね。執つ漣」  
「暮のうちに何うかしようと云ふんだらう。馬鹿らしいや」  
細君はもう鳥田を相手にする必要がないと思

しませう。私や昔鳥田さんが扱つた所を遣つてゐなすつた頃、あすこに勤めてゐたものです。ほら貴方が悪戯をして、小刀で指を切つて、大騒ぎをしたことがあるでせう。あの小刀は私の硯箱の中にあつたんでさあ。その時金盞に水を取つて、貴方の指を冷したのも私ですぜ」  
健三の頭には左右した事實が明らかにまだ保存されてゐた。然し今自分の前に坐つてゐる人の其時の姿などは夢にも憶ひ出せなかつた。

「その縁故で今度又私が頼まれて、鳥田さんの爲に上つたやうな譯合なんです」  
彼は直ぐ本題に入つた。さうして健三の豫期してゐた通り金の請求を始めた。

「もう再び御宅へは何はないと云つてますから」  
「此間歸る時既に左右云つて行つたんです」  
「で、何うでせう。此處いらで綺麗に片を付けてる事したら。それでないと何時迄経つても貴方が迷惑するざりですよ」  
健三は迷惑を省いてやるから金を出せと云つた風な相手の口氣を快く思はなかつた。

「いくら引つ懸つてゐたつて、迷惑ぢやありません。何うせ世の中の事は引つ懸りだらけなんですから。よし迷惑だとしても、出すまじき金

つた。健三の心は却つて昔の關係上多少の金を彼に遣る方に傾いてゐた。然し話は其處迄發展する機會を得ずに餘所へ外れてしまつた。

「御前の宅の方は何うだい」  
「相變らず困るんでせう」  
「あの鐵道會社の社長の口はまだ出来なないかい」  
「あれは出来るんですつて。けれども左右此方の都合の好いやうに、ちよつくら一寸といふ譯には行かないんでせう」  
「此暮のうちに六づかしいかね」  
「逆も」  
「困るだらうね」  
「困つても仕方がありませんわ。何も彼もみんな運命なんだから」  
細君は割合に落付いてゐた。何事も諦めてゐるらしく見えた。

「困るだらうね」  
「困つても仕方がありませんわ。何も彼もみんな運命なんだから」  
細君は割合に落付いてゐた。何事も諦めてゐるらしく見えた。

見知らない名刺の持参者が、健三の指定した通り、中一日置いて再び彼の支關に現れた時、彼はまださくられた洋筆先で、粗末な半紙の上に、九だの三角だのと色々な符號を附けるのに忙がしかつた。彼の指頭は赤い印氣で所々汚れ

を出す位なら、出さないで迷惑を我慢してゐた方が、私には餘程心持が好いんです」  
其人はしばらく考へてゐた。少し困つたといふ様子も見えた。然しやがて口を開いた時は思ひも寄らない事を云ひ出した。

「それに貴方も御承知でせうが、離縁の際貴方から鳥田へ入れた書付がまだ向うの手にありますから、此際若干でも頼めたものを渡して、あの書付と引き替へになすつた方が好くはありませんか」  
健三は其書付を憶ひ覚えてゐた。彼が實家へ復讐する事になつた時、鳥田は當人の彼から一札入れて貰ひたいと主張したので、健三の父も已むを得ず、何でも好いから書いて遣れと彼に注意した。何も書く材料のない彼は仕方なしに筆を執つた。さうして今度離縁になつたに就いては、向後御互に不義理不人情な事はしたくないものだといふ意味を僅二行餘に纏つて先方へ渡した。

「あんなものは反故同然です。向で持つてゐても役に立たず、私が貰つても仕方がないんだ。もし利用出来る氣ならいくらでも利用したら好いでせう」  
健三にはそんな書付を賣り付けに掛る其人の

九十五



態度が猶氣に入らなかつた。

九十六

話が行き詰ると其人は休んだ。それから好い加減な時分にまた同じ問題をとり上げた。云ふ事は散漫であつた。理で押せなければ情に訴へるといふ風でもなかつた。たゞ物にさ、すれば好いといふ料簡が露骨に見透かされた。收束する所なく共に動いてゐた健三は仕舞に飽きた。「書付を買へ、今に迷惑するのが厭なら金を出せ」と云はれると此方でも断るより外に仕方がありませんが、困るから何うかして貰ひたい、其代り向後一切無心がましい事はぶつて来ない」と保證するなら、昔の情義上少しの工面はして上げて貰ひませぬ。

「え、それが詰り私に來た主意なんですから、出来るなら何うかさう願ひたいもんで」

健三はそんなら何故早くさう云はないのかと思つた。同時に相手も、何故もつと早くさう云つて呉れないのかといふ顔付をした。

「ぢや何の位出して下さいませ」

健三は黙つて考へた。然し何の位が相當の處だか判明した目安の出で来よう筈はなかつた。其上成るべく少い方が彼の便宜であつた。

「まあ百圓位なものですね」

百圓

其人は斯う繰り返した。「何うでせう、責めて三百圓位にして遣る譯には行きますまいか」

「出すべき理由さへあれば何百圓でも出します」

「御尤もだが、島田さんもあゝして困つてもんだから」

「そんな事をいやあ、私だつて困つてゐます」

彼の語氣は寧ろ皮肉であつた。「元來一文も出さないとぶつたつて、貴方の方ぢや何うする事も出来ないでせう、百圓で悪けりや御止しなさい」

「どう／＼來た」

「何うしたつて云ふんです」

「又金を取られるんだ。人さへ來れば金を取られるに極つてるから厭だ」

「馬鹿らしい」

健三は別に同情のある言葉を口へ出さなかつた。

だつて仕方がないよ

健三の返事も簡單であつた。彼は其處へ落付く迄の筋道を委しく細君に話してやるのさへ面倒だつた。「そりや貴人の御金を貴夫が御遣りになるんだから、私何も云ふ譯はありませんわ」

「金なんかあるもんか」

健三は驚き付ける様に斯う云つて、又書齋へ入つた。其處には鉛筆で一面に汚された紙が所々赤く染つた儘机の上で彼を待つてゐた。彼はすぐ洋筆を取り上げた。さうして既に汚れたものを猶更赤く汚さなければならなかつた。

客に會ふ前と會つた後との氣分の相違が、彼を不公平にしはしまいかとの恐れが彼の心に起つた時、彼は一旦讀み了つたものを念のため又讀んだ。それですら三時間前の彼の標準が今の標準であるか何うか、彼には全く分らなかつた。

「神でない以上公平は保てない」

彼はあやふやな自分を辯護しながら、ずんずん眼を通し始めた。然し積重ねた半紙の束は、いくら速力を増しても盡きる期がなかつた。漸く一組を元の様に折ると又新しく一組を開

れた人員を選ばなければならなかつた總理大臣は、細君の父の名前の上に遠慮なく棒を引いてしまつた。彼はつひに還に洩れた。何かの意味で保險の付いてゐない人へのみ薄海であつた債權者は直に彼の門に逼つた。官邸を引き拂つた時に召使の数を減らした彼は、少時して自用俵を脱した。仕舞にわが住宅を擧げて人手に渡した頃は、もう何うする事も出来なかつた。目を重ね月を追つて益々悲境に沈んで行つた。

「相場に手を出したのが悪いんですよ」

「細君は斯んな事も云つた」

「御役人をしてゐる間は相場師の方で儲けさせて呉れるんです。だから好いけれども、一旦役を退くと、もう相場師が構つて呉れないから、みんな駄目になるんださうです」

「何の事だか要領を得ないね。だいち意味さへ解らない」

「貴方に解らなかつたつて、左右なら仕方がないぢやありませんか」

「何を云つてるんだ。それぢや相場師は決して損をしつこないものに極つちまふぢやないか。馬鹿な女だな」

健三は其時細君と取り換はせた談話迄憶ひ出した。

かなければならなかつた。

「神でない以上辛抱だつてし切れない」

彼は又洋筆を放り出した。赤い印氣が血のやうに半紙の上を滲んだ。彼は帽子を被つて寒い往來へ飛び出した。

九十七

人通りの少い町を歩いてゐる間、彼は自分の事ばかり考へた。

「御前は必竟何をしに世の中に生れて來たのだ」

彼の頭の何處かで斯ういふ質問を彼に掛けるものがあつた。彼はそれに答へたくなかつた。

成るべく返事を避けようとした。すると其聲が猶彼を追窮し始めた。何處でも同じ事を繰返して已めなかつた。彼は最後に叫んだ。

「分らない」

其聲は忽ちせら笑つた。

「分らないのぢやあるまい。分つてゐても、其處へ行けないのだらう。途中で引懸つてゐるのだらう」

「己の所爲ぢやない。己の所爲ぢやない」

健三は逃げるやうにぞん／＼歩いた。

賑やかな通りへ來た時、連年の支度に忙しい

外界は驚異に近い新しさを以て急に彼の眼を刺された。彼の氣分は漸く變つた。

彼は各の注意を惹くために、あらゆる手段を盡して飾り立てられた店頭を、それからそれと覗き込んで歩いた。或時は自分と全く交渉のない、珊瑚櫛の根懸だの、時輪の櫛笄だのを、硝子越に何の意味もなく長い間眺めてゐた。

「君になると世の中の人は何處何か買ふものかしら」

「少くとも彼自身は何も買はなかつた。細君も殆ど何も買はないと云つて可かつた。彼の兄、彼の姉、細君の父、何れを見ても、買へるやうな餘裕のあるものは一人もなかつた。みんな年を越すのに苦しんでゐる連中ばかりであつた。

中にも細君の父は一番非道さうに思はれた。

「貴族院議員になつてさへゐれば、何處でも待つて呉れるんださうですけれど」

「借金取に責められてゐる父の事情を夫に打ち明けた序に、細君はかつて斯んな事を云つた。

それは内閣の瓦解した當時であつた。細君の父を内閣から引張り出して、彼の辭職を餘儀なくさせた人は、自分達の退く間際、彼を貴族院議員に推挙して、幾分か彼に對する義理を立てようとした。然し多數の候補者の中から、限ら



彼は不圖氣が付いた。彼と擦れ違ふ人はみんな急ぎ足に行き過ぎた。みんな忙しきうであつた。みんな一定の目的を有つてゐるらしかつた。それを一刻も早く片付けるために、せつせと活動すると思はれなかつた。或者はまるで彼の存在を認めなかつた。或者は通り過ぎる時、ちよつと一瞥を與へた。「御前は馬鹿だよ」種には斯んな顔付をするものさへあつた。彼は又宅へ歸つて赤い印氣を汚い半紙へなすくり始めた。

九十八

二三日すると鳥田に頼まれた男が又刺を通じて面會を求めに來た。行掛り上斷る譯に行かなかつた健三は、座敷へ出て差配じみた其人の前に再び坐るべく餘儀なくされた。「何うも御忙しい所を度々出まして」彼は世事情れた男であつた。口で氣の毒さうな事をいふ割に、それ程殊勝な様子を彼の態度の何處にも現はさなかつた。「實は此間の事を鳥田によく話しました所、さういふ譯なら致し方がないから、金額はそれで宜しい、其代り何うか年内に頂戴致したい、

と斯ういふんですがね」健三にはそんな見込がなかつた。「年内たつてもう僅かの日数しかないぢやありませんか」「だから向うでも急ぐ様な譯でしてね」「あれば今すぐ上げてほしいんです。然し無いんだから仕方がないぢやありませんか」「さうですか」二人は少時無言の儘であつた。「何うでせう、其處のところを一つ御奮發は願はれますまいか。私も折角斯うして忙しい中を、鳥田さんのために、わざ／＼遣つて來たもんですから」それは彼の勝手であつた。健三の心を動かすに足る程の手段でも面會でもなかつた。「御氣の毒ですが出来ませんね」二人は又沈黙を間に置いて相對した。「ちや何時頃頂けるんでせう」健三には何時といふ目的もなかつた。「いづれ來年にでもなつたら何うにかしませう」

九十九

「私も斯うして頼まれて上つた以上、何とか向へ返事をしなくつちやなりませんから、せめて日限でも一つ御取極めを願ひたいと思ひます」飛んだ方角へ外れた。さうして段々こんがらかつて來た。

「御尤もです。ちや正月一杯とでもして置きますせう」健三はそれより外に云ひやうがなかつた。相手は仕方なしに歸つて行つた。其晩寒さと倦意を凌ぐために湯を拵へて貰つた健三は、どろ／＼した鼠色のものを啜りながら、盆を膝の上に置いて傍に坐つてゐる細君と話し合つた。「又百圓何うかしなくつちやならない」「貴夫が遣らないでも好いものを遣るつて約束なんぞなされるから後で困るんですよ」「遣らないでも可いのだけれども、己は遣るんだ」言葉の矛盾がすぐ細君を不快にした。「さう依故地を仰しやれば夫迄です」「御前は人を理窟はいとか何とか云つて攻撃する癖に、自分にや大變形式ばつた所のある女だね」

百

「貴夫こそ形式が御好きなんです。何事にも理窟が先に立つんだから」「理窟と形式とは違ふさ」「貴夫のは同じですよ」「ちや云つて聞かせるがね、己は口に夫論理を

有つてゐる男ぢやない。口にある論理は己の手にも足にも、身體全體にもあるんだ」「そんなら貴夫の理窟がさう空っぽうに見える筈がないぢやありませんか」「空っぽうぢやないんだもの。丁度こゝろ柿の粉のやうなもので、理窟が中から白く吹き出す丈なんだ。外部からくつ付けた砂糖とは違ふさ」斯んな説明が既に細君には空っぽうな理窟であつた。何でも眼に見えるものを、しつかと手に掴まなくつては承知出来ない彼女は、此上夫と議論する事を好まなかつた。又しようと思つても出来なかつた。「御前が形式張るといふのはね。人間の内側は何うでも、外部へ出た所丈を捉まへさへすれば、それで其人間が、すぐ片付けられるものと思つてゐるからさ。丁度御前の御父さんが法律家だもんだから、證據さへなければ文句を付けられる因縁がないと考へてゐるやうなもので……」「父はそんな事を云つた事なんぞありやしません。私だつてさう外部ばかり飾つて生きてゐる人間ぢやありません。貴夫が不圖からそんな解んだ眼で他を見てゐらつしやるから……」細君の臉から涙がぼた／＼落ちた。云ふ事が其間に斷絶した。鳥田に遣る百圓の話が、

「あんなに縁起が悪いから止しました」舞臺とかいふ木の一枚板で中を張り詰めた其大きな唐机は、百圓以上もする見事なものであつた。かつて親類の破産者からそれを借金で抵當に取つた細君の父は、同じ運命の下に、早晩それをまた誰かに持つて行かれなければならなかつたのである。「縁起はどうでも好いが、そんな高價いものを買ふ勇氣は當分此方にもなささうだ」健三は苦笑し乍ら煙草を吹かした。

「さう云へば貴夫、あの人に遣る御金を比田さんから借りなくつて」細君は數から極に斯んな事を云つた。「比田にそれ丈の餘裕があるのかい」「あるのよ。比田さんは今年限り株式の方を已められたんですつて」健三は此新しい報知を當然とも思つた。又異様にも感じた。「もう老朽だらうからね。然し止められれば、猶困るだらうぢやないか」「遣つては何うなるか知れないでせうけれども、差當り困るやうな事はないんですつて」彼の辭職は自分を引き立て、呉れた重役の一人が、社と關係を絶つた事に起因してゐるらしかつた。けれども永年勤続して來た結果、權利として彼の手に入るべき金は、一時彼の經濟状態を測はずには十分であつた。「居食をしてゐても詰らないから、確な人があつたら貸したいから何うか世話をして呉れつて、今日頼まれて來たんです」「へえ、とう／＼金貨を遣るやうになつたのかい」健三は平生から鳥田の因縁を啜つてゐた比田だの姉だのを憶ひ浮べた。自分達の境遇が變る



と、昨日迄輕蔑してゐた人の眞似をして恬として氣の付かない姉夫婦は、反省の足りない點に於いて寧ろ子供をみてゐた。

「何うせ高利なんだらう」  
細君は高利だか低利だか丸で知らなかつた。「何でも旨く運轉すると月に三四十圓の利子になるから、それを二人の小遣にして、是から先細く長く遣つて行く積だつて、御姉えさんがさう仰しやいましたよ」  
健三は姉のいふ利子の高から算算用で元金を期定して見た。

「悪くすると、又みんな損つちまふ丈だ。それより左右懸望しないで、銀行へでも預けて置いて相當の利子を取る方が安全だがな」  
「だから確な人に貸したいつて云ふんでせう」  
「確な人はそんな金は借りないさ。怖いからね」  
「だけど普通の利子ぢや遣つて行けないんでせう」  
「そぢやぢや已だつて借りるのは厭ださ」  
「御兄いさんも困つてゐらしてよ」

比田は今後の方針を兄に打ち明けると同時に、先づ其手始として、兄に金を借りて呉れと頼んだのださうである。

「馬鹿だな、金を借りて呉れ、借りて呉れつて、此方から頼む奴もないぢやないか。兄貴たつて金は欲しいだらうが、そんな儲けな思ひ遣して借りる必要もあるまいからな」

健三は苦々しいうちにも滑稽を感じた。比田の手前勝手な氣性が此一事でも能く窺はれた。それを傍で見て澄ましてゐる姉の料簡も彼には不可思議であつた。血が續いてゐても姉弟といふ心持は全くしなかつた。  
「御前己が借りるとでも云つたのかい」  
「そんな餘計な事云やしません」

百

利子の安い高いは別問題として、比田から願つて貰ふといふ事が、健三には逆も眞面目に考へられなかつた。彼は毎月若干か宛の小遣ひを姉に送る身分であつた。其姉の亭主から今度此方で金を借りるとなると、矛盾は誰の眼にも映る位明白であつた。  
「辻褄の合はない事は世の中に幾何でもあるにはあるが」  
斯う云ひ掛けた彼は突然笑ひたくなつた。  
「何だか變だな。考へると可笑しくなる丈だ。まあ好いや己が借りて遣らなくつても何うにか

なるんだらうから」

「え、そりや借手はいくらでもあるんでせう。現にもう一口ばかり貸したんですつて、彼處の待合か何かへ」

待合といふ言葉が健三の耳に驚更滑稽に響いた。彼は我を忘れたやうに笑つた。細君にも夫の姉の亭主が待合へ小金を貸したといふ事實が不調和に見えた。けれども彼女はそれを夫の名前に關すると思ふやうな性質ではなかつた。たゞ夫と一所になつて面白さうに笑つてゐた。

滑稽の感じが去つた後で反動が來た。健三は比田に就いて不愉快な言遣思ひ出させられた。それは彼の二番目の兄が病死する前後の事であつた。病人は平生から自分の持つてゐる兩蓋の銀時計を弟の健三に見せて、「是を今に御前に遣らう」と啗ど口癖のやうに云つてゐた。時計を所有した経験のない若い健三は、欲しくて堪まらない其裝飾品が、何時になつたら自分の帯に巻き付けられるだらうかと想像して、暗に未來の得意を豫算に組み込みながら、一二箇月を暮らした。  
病人が死んだ時、彼の細君は夫の言葉を尊重して、その時計を健三に遣るとみんなの前で明言した。一つは亡くなつた人の記念とも見る

べき此品物は、不幸にして質に入れてあつた。無頼健三にはそれを受用する力がなかつた。彼は義姉から所有權を譲り渡されたと同様で、肝心の時計には手も觸れる事が出来ずじや幾日かを過ぎた。

或日皆が一つ所に落合つた。すると其席上で比田が問題の時計を懐中から出した。時計は見違へる様に磨かれて光つてゐた。新しい紐に珊瑚の珠が裝飾として付け加へられた。彼はそれを勿體らしく兄の前に置いた。

「それでは是は貴方へ上げる事にしますから」  
傍にゐた姉も殆ど比田と同じやうな口上を述べた。  
「どうも色々御手数を掛けまして、有難う。ぢや頂戴します」  
兄は謝を云つてそれを受取つた。

健三は黙つて三人の様子を見てゐた。三人は殆ど彼の其處にゐる事さへ眼中に置いてゐなかつた。仕舞迄一言も發しなかつた彼は、腹の中だけで此のしい侮辱を受けたやうな心持がした。然し彼等は平氣であつた。彼等の仕打を仇敵の如く憎んだ健三も、何故彼等がそんな面中がましい事をしたのか、何うしても考へ出せなかつた。

彼は自分の権利も主張しなかつた。又説明も求めなかつた。たゞ無言のうちに愛想を盡かした。さうして親身の兄や姉に對して愛想を盡かす事が、彼等に取つて一番非道い刑罰に違なからうと判断した。

「そんな事をまだ覚えてゐらつしやるんですか。貴方も随分執念深いわね。御兄いさんが御聞きになつたら無御駕さなきさでせう」  
細君は健三の顔を見て暗に其氣色を伺つた。健三はちつとも動かなかつた。

「執念深からうが、男らしくなからうが、事實は事實だよ。よし事實に棒を引いたつて、感情を打ち殺す譯には行かないからね。其時の感情はまだ生きてゐるんだ。生きて今でも何處かで働いてゐるんだ。己が殺しても天が復活させるから何にもならない」  
「御金なんか借りさへしなきあ、それで好いぢやありませんか」  
斯う云つた細君の胸には、比田達ばかりでなく、自分の事も、自分の生家の事も期定に入られてあつた。

百一

歳が改まつた時、健三は一夜のうちに變つた

世間の外観を、氣のなまさらな顔をして眺めた。「すべて餘計な事だ。人間の小刀細工だ」

實際彼の周囲には大晦日も元日もなかつた。悉く前の年の引續きばかりであつた。彼は人の顔を見て御日出たらうといふのさへ厭になつた。そんな殊更な言葉を口にするよりも誰にも會はずに黙つてゐる方がまだ心持が好かつた。彼は普通の服裝をしてぶらりと表へ出た。成るべく新年の空氣の通はない方へ足を向けた。冬木立と覺れた高、葦葎根と細い流、そんなものが凝結した彼の眼に入つた。然し彼は此可憐な自然に對してももう感興を失つてゐた。

春は天氣は穏かであつた。空風の吹き捲らない野面には春に似た霧が遠く懸つてゐた。其間から落ちる薄い日影もおつとりと彼の身體を包んだ。彼は人もなく路もない所へわざ／＼迷ひ込んだ。さうして融けかけた霜で泥だらけになつた靴の重いのに氣が付いて、しばらく足を動かさずにゐた。彼は一つ所に佇立んでゐる間に、氣分を紛らさうとして輪を描いた。然し其輪があまり不味いので、寫生は却つて彼を自棄にする丈であつた。彼は重たい足を引揚つて又宅へ歸つて來た。途中で鳥田に逢るべき金の事を考へて、不圖何か書いて見ようといふ



赤い印紙で汚い半紙をなすくる業は漸く済んだ。新しい仕事の始まる迄にはまだ十日の間があった。彼は其十日を利用してしようとした。彼は又洋筆を執つて原稿紙に向つた。

健康の次第に衰へつゝある不快な事實を認めながら、それに注意を拂はなかつた彼は、猛烈に働いた。恰も自分で自分の身體に反抗でもするやうに、恰もわが衛生を虐待するやうに、又已の病氣に敵討でもしたいやうに。彼は血に傾きた。しかも他を雇ふ事が出来ないで已むを得ず自分の血を吸つて満足した。

「あゝ、あゝ」  
彼は眼と同じやうな聲を擧げた。書いたものを金に換へる段になつて、彼は大した困難にも遭遇せずに済んだ。たゞ何んな手直さでそれを島田に渡して好いか、一寸迷つた。直接の會見は彼も好まなかつた。向うももう參上りませんと云ひ放つた。最後の言葉に對して、彼の前へ出て来る氣のない事は知れてゐた。何うしても中へ入つて取り次ぐ人の必要があつた。

「矢つ張御兄さんか比田さんに御頼みなさるより外に仕方がないでせう。今迄の行掛りもあるんだから」  
「まあ左右でもするのが、一番適當な所だらう。あんまり有難くはないが、公的な他人を頼む程の事でもないから」  
健三は津守坂へ出掛けて行つた。

「百圓遣るの」  
驚いた姉は勿體なさうな眼を丸くして健三を見た。  
「でも健ちゃんなんぞは顔が顔だからね。さういふつたれた眞似も出来まいし、それにあの島田つて爺さんが、たゞの爺さんと違つて、あの通りの悪黨だから、百圓位仕方がないだらうよ」  
姉は健三の腹にない事迄一人合點でべら／＼喋つた。

「ただ御正月早々御前さんも随分好い面の皮さね」  
「好い面の皮の濃登りか」  
先刻から傍に胡坐をかいて新聞を見てゐた比田は、此時始めて口を利いた。然し其言葉は姉に通じなかつた。健三にも解らなかつた。それを左も心得顔にはあゝと笑ふ姉の方が、健三には却つて可笑しかつた。

「でも健ちゃんはいね。御金を取らうとすれば幾何でも取れるんだから」  
「此方とらとは少し頭の寸法が違ふんだ。有大陸船朝公の御贖と来てゐるんだから」  
比田は變挺な事ばかり云つた。然し頼んだ事は一も二もなく引き受けて呉れた。

百二

比田と兄が揃つて健三の宅を訪問れたのは月の半ば頃であつた。松島の取り拂はれた往來にはまだ何處となく新年の香がした。暮も春もない健三の座敷の中に坐つた二人は、落付かないやうに其處いらを見送した。

比田は懐から書付を二枚出して健三の前に置いた。  
「まあ是で漸く片が付きました」  
其一枚には百圓受取つた事と、向後一切の關係を斷つといふ事が古風な文句で書いてあつた。手蹟は誰のとも判別が付かなかつたが、島田の印は確に捺してあつた。  
健三は「然る上は後日に至り」とか、後日のため誓約の如し」とかいふ言葉を馬鹿にしなから黙讀した。  
「何うも御手数敷でした、ありがたう」

「斯ういふ認文さへ入れさせて置けばもう大丈夫だからね。それでない何時迄着纏く付け置はられるか分つたもんぢやないよ。ねえ長さん」  
「さうさ。是で漸く安心出来たやうなものだ」

比田と兄の會話は少しの感銘も健三に與へなかつた。彼には道らないでもいゝ百圓を好意的に遣つたのだといふ氣ばかり強く起つた。面倒を避けるために金の力を藉りたとは何うしても思へなかつた。

彼は無言の儘もう一枚の書付を開いて、其處に自分が復讐する時島田に送つた文書を見出した。  
「私儀今般貴家御縁に相成、實父より養育料差出候に就ては、今後とも互に不買不人情に相成らざる様心掛度と存候」  
健三には意味も論理も能く解らなかつた。  
「それを賣り付けようといふのが向うの腹さね」  
「つまり百圓で買つて遣つたやうなものだね」  
比田と兄は又話し合つた。健三は其間に言葉を挟むのさへ厭だつた。  
二人が歸つたあとで、調子は夫の前に置いて

ある二通の書付を開いて見た。  
「此方の方は豈が眞つてますね」  
「反故だよ。何にもならないもんだ。破いて紙屑籠へ入れてしまへ」  
「わざ／＼破かなかつても好いでせう」  
健三はそのまゝ席を立つた。再び顔を合はせた時、彼は細君に向つて訊いた。

「先刻の書付は何うしたい」  
「筆筒の油斗に仕舞つて置きました」  
彼女は大それたものでも保存するやうな口振で斯う答へた。健三は彼女の所置を咎めもしない代りに、賞める氣にもならなかつた。  
「まあ好かつた。あの人は是で片が付いて」  
細君は安心したと云はぬばかりの表情を見せた。

「何が片付いたつて」  
「でも、あゝして認文を取つて置けば、それで大丈夫でせう。もう来る事も出来まいし、来たつて構ひ付けなければ大差ぢやありませんか」  
「そりや今迄だつて同じ事だよ。左右しようと思へば何時でも出来たんだから」  
「だけど、あゝして書いたものを此方の手に入れて置くの大變逆ひますわ」  
「安心するかね」

「えゝ安心よ。すつかり片付いちやつたんですもの」  
「まだ中々片付きやしないよ」  
「何うして」  
「片付いたのは上部丈ぢやないか。だから御前は形式要つた女だといふんだ」  
細君の顔には不審と反感の色が見えた。

「ぢや何うすれば本當に片付くんです」  
「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない。一週起つた事は何時迄も續くのさ。たゞ色々な形に變るから他にも自分にも解らなくなる丈の事さ」  
健三の口調は吐き出す様に苦々しかつた。細君は黙つて赤ん坊を抱上げた。  
「おゝ、好い子だ／＼。御父さまの仰しやる事は何だかちつとも分りやしないわね」  
細君は斯う云ひ／＼、機度か赤い顔に接吻した。





「夏目漱石集」の後に

何故にからいふ編者の仕方をしたかに就いて、此所に簡単に私の考へを書いて置くのは、私の義務でもあると思ふ。一般の讀者にとつて此事は、漱石先生を理解する上に、或は何等かの参考になるかも知れない。

『吾輩は猫である』は初めて先生を世間的に有名にした作品である。然もこの作品が先生の一面を最も顯著に代表してゐるものである以上、是はまづ第一に集中に加へられなければならない作品である。然し『猫』の全部を此所に置くといふ事は、限られたる頁数では他の重要な作品を除外しなければならぬといふ意味で、到底不可能の事であつた。その上『猫』は元來最初のも一つで読み切りにする積りで書かれたものである。それが世評もよく編輯者の勧め方も熱心を極めた爲に、第二を書き第三を書き頭第十一まで書き続けられた。従つて是は、章は十一までであると言つても、先生自身が『猫』上篇の序で「此書は趣向もなく、構造もなく、尾頭の心元なき海鼠の様な文章であるから、

たとひ此「巻」で消えてなくなつた所で一向差し支へない」と言つてゐる様に、章の途中で切りさへしなければ、章と章とは、何所で切つても構はない筈のものである。それで私はその第一から第三までを選び上げた。

『猫』の第一を書く時には無論先生は第二を書く事を豫想しなかつた、第二を書く時には先生は恐らく第三を書く事はつきりとは豫想しなかつた、然し第三を書く時には書き事が出来たら先きを書き續けても可い位には考へてゐたに違ひない。——是は無論私の想像である。然しこの想像は、形式の整へ方が第一と第二とではそれ／＼一つの纏まつた文章となつてゐるに反して、第三になると殊にその結末の一節が、何かしら後に来るものを持つてゐて、それ自身は充分に終結してゐない様な感じを與へる所から、主として引き出されたものである。然も『猫』の文章が持つ味の方から見ても、第一には前に慣ましやかな、言はば何所かにおど／＼した所があり、第二にも晴れやかな心持も交つ

てはゐるが、尙何となく遠慮げに丁寧な書いてゐる所があるのに、それが第三になると、先生の心持は思ひ切つて自由になり、書きたい事は思ふ存分書きまくると言つた感じに變つて來てゐる。さうして『猫』は、最後まで、この第三の調子を持ち續けて進んで行つてゐるのである。この意味から言つて、『猫』の第三は、丁度三代將軍家光の様に、『猫』の第一、二の基礎を確立したものだと思ふ事も出来る。それ故私は、ある意味からは『猫』の全部を代表させ得るとも考へて、その第一から第三までを選び上げたのである。

先生は『猫』を書いて有名になつた。然し『猫』を書いて有名になつた事で、先生は随分損をした。なぜなら、當時の世間の多くは、『猫』の笑ひを笑ひ丈として歡迎して、その奥に藏されてゐる先生の血と涙とを少しも讀みとる事がなかつたからである。さうして先生を、眞面目な問題をも不眞面目に受とつて了ふ滑稽作家として、先づ折紙をつけて了つたからである。然しその實先生ほどの眞面目な眞實な作家は、當時何所にも存在してゐなかつた。今日といへどもその點で先生に無行し得る作家がそれほど多くあると思はれない。

(に後の「集石漱目夏」)

然し若し今日の讀者の内、一冊を讀んで、先生の不眞面目な、に觸れる様に感じる讀者があるならば、その人は、同時に『道草』を併せて讀んで見るが可いと思ふ。勿論『道草』は獨立して立派な藝術的價値を持つてゐる作品である。私は『猫』の辯護の爲に、是を集中に加へたのではない。然し『道草』に取り扱はれてゐる先生自身の生活の上の時期は、凡そ『猫』が書かれてゐる時期と、殆んど重なり合ふ位な時期である。『道草』を通してその時期の先生の生活氣分を感じると、先生が先生のどういふ生活氣分の下に生れたものであるかを知る事によつて、『猫』の中の眞面目な分子と『猫』の奥に潜んだ悲痛な心持とを、より具體的に感じる事が出来るに違ひない。

もつとも先生の『道草』が書かれたのは、大正四年四月中旬以後の事である。従つてそこに取り扱はれてゐる生活氣分そのものは、丁度『猫』が書かれてゐる前後の生活氣分ではあつても、それを取り扱ふ取り扱ひ方は、明治三十七八年の取り扱ひ方ではなくて、正に大正四年の取り扱ひ方である。先生が當時の氣分をかういふ風に取り扱ひ得る爲めには、先生はその間に凡そ十年の間隔を置かなければならなかつ

たのだとも言へる。然もそれだけにまた『道草』は、初期の作品に見る事の出来ない、特別な美しさを持つ作品となつてゐるのである。

『道草』の主人公は、通れ難き過去を持ち、通れ難き肉の絆を持ち、通れ難き社會的義務を持ち、また通れ難き自己完成の衝動を持ち、振り棄てたくても振り棄てる事が出来ず、愛し微したくても愛し微す事が出来ず、どつちにも片づかない心持で、悩み憤り悲しみ苦しんでゐる人間である。然も作者はその主人公の悩みや憤りやを、同情はするが、然し一段高い所から見下ろして描いてゐる。従つて主人公が憎みを感じる相手に對しても、假令主人公のその心持は認めはしても、主人公と一緒にやつて、それを憎まうとはしてゐない。それどころか、主人公に對すると同じ程度の寛容を持つて主人公の相手の感情や動作を眺め、ある時は主人公の相手に對する過誤を過誤として穏やかに諷めて遣つてさへもゐる。従つて此所に取り扱はれてゐる材料そのものは、息苦しい様な材料ではあつても、その材料の取り扱ひ方の奥から波れ出て來る光は、可也朗らかな静かな柔らかな美しさを持つた光である。——私は是を、先生のあらゆる長篇小説の内、最も完成した作品

であると思つてゐる。殊に過去から現在へかけて、四十年に亘る主人公の歴史の殆んど全部をその中に盛り込んで、然も現在眼前の事件を層々と進行させ、それに反應して動く主人公の氣分を巨細に描寫し悉く藝術的手腕に至つては、恐らく何所にも其比を求め得まいと思はれる程に、驚嘆に値するものである。

元來先生には美しい夢を愛する方面と醜い現實を憎む方面と二つの方面があつた。それが『道草』では、一つの心の中に止揚されて現はれる。然し先生の初期の作品では、この二つの方面が、交互に一つづつ、特に高調されて現はれる事を常とした。明治三十八年に殆んど同時に出了『猫』と『倫敦塔』と『カーライル博物館』と出た『猫』にはその醜い現實を憎む心がより多く活らいて居り、『倫敦塔』にはその美しい夢を愛する心がより多く活らいて居り、『カーライル博物館』にはそれら二つの心が割に等分に活らいてゐる事が、誰にでもすぐに眼につくだらうと思ふ。同じ事が『雜行』と『坊っちゃん』に就いても言へる。殊に『坊っちゃん』は、先生の道義的肝癪を最も直截な形式によつて、紙の上にもちまけたものである。『草枕』は先生自身も言つてゐる様に、まつた



く開明以来の珍らしい小説である。さうして此所では、醜い現実を憎むが故に美しい夢を愛するといふ事が、最初から堂々と論じられてゐる。此所では、女がどうするとか坊さんがどうするとか髪結床の亭主がどうするとか、中に出て来る事件そのものはさのみ問題にならない。問題になるのは、その事件を美しく受けとる、その受けとり方である。此所で主人公は、その受けとり方を説明するとともに、自分が受けとつたものを我我に列べて見せて呉れる。然し惜しい事に、主人公の夢は、現実の一角を磨り減して得られた夢であつて、現実そのまゝを美しい夢と見得たものではなかつたために、一旦山を下りると、それは破られなければならぬ運命を持たされた夢にすぎなかつた。この事は一面に於て、當時の先生の心の夢と現実との性質並にその二つのものの調和の仕方を示唆する。然も此所に現はされた先生の人生観は、後年の則天去私の人生観と、十年を隔てて遙に相呼應するものでもある。

然しかういふ人生観が後年の則天去私になる爲には、外の言葉で言へば、醜い現実を憎む心と美しい夢を愛する心とがより大きな一つの調和の中に止揚される爲には、先生の内生活は一度激しい力で急回轉をしなければならなかつた。さうして、その急回轉を興へたものは、先生の胃潰瘍であつた。明治四十三年八月修善寺菊屋本店に於ける大吐血であつた。是を機として先生の人と藝術とは、より良く、より東洋的に、急劇に變化する。

先生の日記の中から抜き出して、假に「修善寺日記」と命名した日記と、思ひ出す事などの中から抄出した大吐血直後から数日間の回想とは、この重大な時機に於ける先生の心持の描寫したものとして、我我に無比に貴重な材料を提供するものである。晩年の心境の開展を問題にする者は、誰でも凡て此所から立しなくてはならない程、是は先生の研究者にとつて貴重な材料を提供するものである。

の相違をなすものである事には疑ひがないけれども、然しそれよりもつと根本的なものは、それを書く當時の先生の心の相違である。前期の小品には、氣を負つた様な感じの心が往々にして現はれる。中期の小品にはそれが殆んど消えて、あるのは、玲瓏玉の様な、然も脈々として暖か味の通つてゐる玉の様な感じの心のみである。その點で中期のものは後期のものと一筋になつて前期のものに對照する。私が特に小品を後期まで三つに分けたのは、中期に對しては大した意味をなさない。唯「菊屋」の中からは抄出したものは、年代が大正四年であるといふ事と、纏つて一つの空氣を、全體に互つて沁やかな調子を多分に帯びてゐるといふ事とから、便宜上獨立させた迄の事である。さうしてその調子を多分に帯びてゐるといふ事は、是が、懐かし味を持つて回顧せられた先生の遠い過去であるといふ事に起因する。これ等の小品の持つ味と「道草」の中に點綴された先生の遠い過去の回想が、どういふ所で合ひどういふ所で離れるかを點檢して見る事も、ある種の讀者には興味のある事かも知れない。

それのみではない、「日記」には多くの發句と漢詩とが挟まれてゐる。先生の發句と漢詩とを愛する私は、この「日記」を集中に加へる事によつて、特に私が一番可い句が澤山あると信じてゐる。修善寺病中の句を、同時に公けにし得る事を、非常に嬉しく思ふ。先生の句は、修善寺病中以後に於て、先生の誠を吐露する句となつた。私は、修善寺病中以後の句には、先生の一番美しいサイドが、或は一番純粹に現

はれてゐるのではないかとさへ思つてゐるのである。この事を私は同時に先生の小品に就いても考へる。詩人としての素質を最も彼に恵まれてゐた先生は、詩に於て、さうして詩に最も近い形式の散文に於いて、その素質を最も純粹に表現する事が出来るのではないか。少くとも小品を除いた先生の集は、私にとつては、先生の集としては到底考へられない。従つて私は小品を前期と中期と後期とに分けて、「カライル博物館」や「文鳥」や「永日小品抄」を前期の代表に、「ケイベル先生」を中期の代表に、「前子戸の中」抄を後期の代表に選んで見た。同じ小品でも、前期の小品には、何所かに尖鋭しい所がある。私はなるべくさういふ味の少ない、同味の多いものを選びうとした。「ケイベル先生」は修善寺大患後凡そ一年を経て書かれたものである。是は中期の代表と言はず、先生のあらゆる小品の中で最も美しい小品である。是と「永日小品」の中の「クレイグ先生」とを比べて見ると、前期の小品と中期の小品との間にどういふ差があるかを、可也具體的に攷む事が出来るだらうと思ふ。勿論二人に對する先生の感情の動き方の相違が、二つの小品の興へる感じ

昭和二年五月 小宮 豊 隆







「朝日」はそのうち十六篇を掲げたり。六月二十七日より十月十四日まで「それから」を「朝日」に連載す。九月二日出発満洲旅行の途につき十月十七日歸京す。十月二十一日より十二月三十一日まで「満洲とこゝろ」を「朝日」に連載す。十一月二十五日より「朝日文藝欄」を兼任す。三月「文學評論」出版。五月「三四郎」出版。

明治四十三年

三月一日より六月十二日まで「門」を「朝日」に連載す。六月十八日胃潰瘍の疑ひにて、七月三十一日まで内幸町胃腸病院入院。八月六日修善寺に轉地。十七日、十九日、二十四日と引續きて吐血。十月十一日快復して歸京、直に胃腸病院に入院す。十月二十九日より「思ひ出す事など」朝日に掲載され始む。五月「四篇」出版。

明治四十四年

二月十九日「思ひ出す事など」掲載され了る。二月二十六日胃腸病院退院。七月十六日「ケibel先生」を「朝日」に掲ぐ。七月二十五日

より七月三十一日まで「手紙」を掲ぐ。八月十一日出発、朝日新聞社主催の講演會の爲に、明石、堺、和歌山、大阪に赴き、講演後八月十九日大阪にて再び潰瘍の爲め湯川病院に入院。九月十四日歸京。十月末朝日文藝欄を廢止す。十一月一日辭表を提出し、十一月二十日退社を撤回す。十一月「門」出版。八月「切抜帖より」出版。十一月朝日新聞社の「朝日講演集」出づ。

明治四十五年、大正元年

一月一日より四月二十九日まで「彼岸過迄」を「朝日」に連載す。十月十五日より十月二十八日まで「文展と藝術」を「朝日」に連載す。十二月六日より「行人」連載され始む。九月「彼岸過迄」出版。

大正二年

三月末より胃潰瘍の爲に臥床。「行人」は「歸つてから」四月七日掲了るまでにて一時斷筆。九月十六日よりその續編「塵勞」連載され始め、十一月十五日に至つて完結す。二月講演集「社會と自分」出版。

大正三年

一月七日より一月十二日まで「素人と黒人」を「朝日」に掲ぐ。四月二十日より八月十一日まで「心」を「朝日」に連載す。一月「行人」出版。十月「心」出版。

大正四年

一月十三日より二月二十三日まで「硝子戸の中」を「朝日」に連載す。三月十九日出発、京都に旅行し、潰瘍にて臥床。四月十七日歸京。六月三日より九月十日まで「道草」を「朝日」に連載す。四月「硝子戸の中」出版。十月「道草」出版。

大正五年

一月一日より一月二十一日まで「點頭錄」を「朝日」に連載す。一月二十八日より二月十六日まで湯河原療養所。五月二十六日より「明暗」朝日に連載され始む。十一月二十二日潰瘍。十二月九日退院。「明暗」は第百八十八回(十二月十四日まで掲載)にて中斷されたり。

昭和二年六月十日發行

現代日本文學全集 第十九篇



著者	夏目漱石
發行者	山本美
印刷者	杉山愛二

發兌

東京市麹町區内幸町一丁目壹番地  
幸ビルヂイディングヂ壹階

改

造社

電話 東京一八〇五七四  
東京一八〇五七四  
東京一八〇五七四

刷印舎美秀 社會式株



918.6  
G341  
(19)



終